

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	平井, 智尚(Hirai, Tomohisa)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2022
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.27 (2022. 7) ,p.105- 106
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0105">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0105</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 著者リプライ

平井 智尚

評者の塚田修一先生はご自身が専門とする歴史社会学や文化社会学の立場からメディアやポピュラー文化を扱う。筆者はメディアやポピュラー文化に関わる現象を論じる中で社会学の知見を参照する。大変失礼ではあるが、メディアやポピュラー文化の「色物」を研究対象として扱い、その成果も「色物」と見られるとき、両者にさほどの違いはないように思える。しかし、学術研究の世界では両者の立ち位置は異なる。若干のしなさを覚えながらメディア研究に足場を置く筆者にとって、社会学に立脚した研究を手掛ける塚田先生に書評をいただいたことは僥倖であり、この場を借りてお礼申し上げる。

社会科学の目的や意義を簡潔に述べるのであれば「社会」の理解であろう。その目的や意義にかなうのであれば研究対象に貴賤はない。こうした教科書的エトスに依拠するならば、アイドル、漫画、アニメといったポピュラーなコンテンツは研究対象となり得る。道端のごみや落書きといった一見くだらないものであっても研究対象となり得る。このことは本書の研究対象である「ネットカルチャー」にも当てはまる。しかし、社会科学の研究対象には一定の価値が伴うのが一般的であり、研究者は価値から逃れることはできない。この「価値」がネットカルチャー研究において（少なくとも筆者にとって）負担となる。

本書では2ちゃんねる（現・5ちゃんねる）および同掲示板と類した生活様式やコンテンツの総体を「ネットカルチャー」として扱っている。このネットカルチャーは、日本社会において、ある程度は認知されながらも見て見ぬふりをされてきた。蔑まれてきたと言っても過言ではないだろう。そのような扱いはネットカルチャー研究および研究を手掛ける者にも降りかかる。筆者の扱いはどうでもよい。ただ、研究に関しては社会的な評価とは一線を画し、その理解につとめ、意義を示さねばならない。そこで本書ではそれ自体が一定の価値を帯びる社会科学の蓄積に依拠し、ネットカルチャーが研究対象になり得ることを示した。評者の至言を借りるならば、ネットカルチャーに付与された価値を「解体」したということになる。

だがそうした作業を経て生じたのは、評者の言う「おもしろさ」の欠如である。学術研究を含む様々な世界で「色物」扱いを受けるポピュラーな現象をあえて研究対象とする意義は、その担い手であるふつうの人たちの生活や実践が社会を理解するうえで示唆を与えてくれるためである。そうした生活や実践は、時に想像もつかないような「おもしろさ」を伴う。評者も指摘するように、本書が対象とするネットカルチャーの領域にはおもしろいものがあふれかえっている。例えば、そのフィールドへ参入し、ユーザーの営みをつぶさに観察し、書き記すような研究成果は多分おもしろい。また、インターネット上に存在する豊潤なログをアーカイブと

して扱い、テキストや言説の分析へ展開するような研究もおもしろいと思う。本書にそのようなおもしろさが認められないのは、つまるところ、生きた経験を丁寧に取り扱い、分厚い研究を手がけるだけの力量を筆者が持ち合わせていないためである。あわせて、ネットカルチャーが帯びる価値から筆者が自由になれなかったという理由もある。

以上をもって書評へのリプライに代え、今後の研究の糧にするという締め方はいささか投げやりで、評者にも失礼である。そこで最後に本書の「短所」とされる部分の学術的な貢献の可能性を述べておきたい。書評でも指摘されているように、本書の課題の一つとして理論的な領域・系譜という面での一貫性の乏しさが挙げられる。メディア研究は学際的な分野である。だが、それゆえに様々な学問領域の表層をつぎはぎした「メディア論」となる恐れがある。本書もまさしく「メディア論」であろう。ただ同時に、ネットカルチャーは様々な観点からアプローチする余地があり、学術的な発展の可能性もあることも示している。ネットカルチャーの議論は単なるメディア論にとどまるわけではない。本書の 2 章でも扱ったように、時にネットカルチャーは社会問題と結びつく。また、「オルタナ右翼」、「マノスフィア」、「陰謀論」といった米国を文脈とするインターネット空間で見られる政治的な現象はネットカルチャーと不可分である。近年、政治経済的な視点から批判的な考察が展開されているデジタル・プラットフォームやデータといった争点とも無関係ではない。こうした学術的にも価値があると思われるテーマとの接点は本書の方々に認められる。

また、インターネット上に匿名で投稿された本書への「感想」などで批判的な指摘がなされていた現代的な事柄への言及の乏しさについても、本書はそれなりの道筋は提示している。SNS や動画サイトのポピュラーな現象を「文化」という観点から論じることは可能であり、必要であるとも思う。昨今で言えば、バーチャル YouTuber (VTuber) や実況・配信 (者) といった対象などが例として挙げられる。ただ、そうした対象の研究に際しては、先行研究の乏しさという困難に直面し、場合によっては、論者の局所的な関心や知識だけが先行した「趣味語り」になる恐れもある。その際、先行研究の補完や趣味語りを回避する手がかりを本書から得られるかもしれない。このような可能性は後続の研究に委ねられるが、その担い手にはもちろん筆者も含まれる。それはまるでインターネット上に見られる「自作自演 (ソックパペット)」の文化である。だが、「自作自演」の学術的な実践が (今のところは) 必要であり、可能であることもネットカルチャー研究の「おもしろさ」でないかと思う。

(ひらい ともひさ 日本大学法学部)